

美学で根拠付けるを当然と考え、住居学にもこれを適用「住居学ノート」の形でまとめ、内第3編を芸術史芸術方面よりの研究とし、日本住宅様式問題を取扱い、その一般的発表は昨年に行ったが内容的に要点の説明が必要と思われるので、その第1問題を表題とした。（「住居学ノート」第2、3編を小冊子にした。）

2. 方法は自分の学位論文発表、「表現の学としての美学」等の発表によられ度い。

3. 本文としては尚古代尺説の必然性の再確認の要点の説明が要求されるので、答えると共に、様式樹立（美術史建築史上十分な様式樹立が有るのではないが、先輩によって苦心して、その根幹は作られて来たのである。）上の問題を主に東大寺塔大仏殿の関係から、従来より、より具体的に述べて置き度い。①東大寺塔高さ古代尺説の必然。立証は伊東理論と大仏殿の正しい復原説による必要有り（従来説は誤謬）②この立証には尚飛鳥奈良美術の空間性よりの科学的様式樹立必要で、古代尺説によって可能である。これに基づいて日本住宅様式の取扱いも科学的に樹立すべきで、その意味において結局、一般発表の様に、その大局は伊東博士説に帰し、その若干を美学的古代尺説より訂正すればよいと言える。（京大建築東大美学美史卒業）（1963. 7月）

C— 7 「美学的古代尺説と住宅様式について」
（その1）「美学的古代尺説により空間芸術史上の科学的様式付けが可能となる」

山陽女子短大 加藤 泰

1. 自分は広大家政科初代主任兼住居学担当教授として、住居学組織の再検討を正式に課されたので、家政学や建築学の如き技術学を通じ、生活芸術表現の3面を持つので、自分のかねて考えているその3面からの弁証法